

2022/7/31

ヨハネの黙示録 講解メッセージ⑱

『ヨハネの黙示録 7章後半 一救いは神にある一』

私たち人間は皆、この地上で死を待つ状態にあります。そして、その間にさまざまな困難や試練に会い、その最大の苦難が死です。ヨハネの黙示録は、死という苦しみにおびえる私たちに、神があなたを助けると約束していることを教えています。この世界にどんな患難や苦しみがあろうとも、神が必ず私たちを助けるという希望を教えているのが、ヨハネの黙示録です。

■神の救い

「彼らは、大声で叫んで言った。「救いは、御座にある私たちの神にあり、小羊にある。」(黙示録 7:10)

聖書が教える救いとは、私たちが死からいのちに移すことです。具体的には、私たちに永遠のいのちを与え、神の国に引き上げてくださるということです。それは神を信じれば誰でも受けられます。

世の中では、救われるためには良い行いを積むなどの条件があるものですが、聖書の教えはそうではありません。聖書が教える救いは行いに対する報酬ではなく、無償で与えられるものです。神が差し出す御手をつかみさえすれば、つまり、神を信じさえすれば、誰でも救われるのです。

私たちが救われるのは、神が救いの御手を差し伸べてくださるからです。ですから、救いは神にあると言えます。誰も自力で神に近づくことはできません。神が差し出してくださる御手をつかむことで、神が引き寄せてくださるのです。

なお、黙示録で「小羊」と呼ばれているのは、イエス・キリストのことです。

「御使いたちはみな、御座と長老たちと四つの生き物との回りに立っていたが、彼らも御座の前にひれ伏し、神を拝して、言った。「アーメン。賛美と栄光と知恵と感謝と誉れと力と勢いが、永遠に私たちの神にあるように。アーメン。」(黙示録 7:11-12)

これは、天の御座の様子であり、被造物が神を礼拝している様子です。「信じる者を救う」という神の計画のために、神は、人間の知恵や理性では愚かにしか思えないことを救いのことばとしました。

まず、「イエスは神である」ということが、理性で理解できることではありません。そして、神が人となってこの世に来られ、私たちの罪を背負って十字架にかかり、私たちを赦してくださったと聖書は教えますが、2000年も前の方がどのように私たちの罪を背負うことができるのか、とうてい理性では理解できません。しかもその方は十字架で殺されてから三日後によみがえったというのです。そして、あなたがたも信じれば復活して永遠に生きることができるというのです。この愚かにしか聞こえない神のことばを信じる者を救うというのが、神の計画です。「納得したら信じる」というのは、信仰とは言いません。神様が求めているのは信じるかどうかです。

つまり、聖書の教えは納得できるものではなく、理解不能のものです。それゆえ、信じるしかないのです。人は、救いを得るためには何か対価が必要だと考えます。そのほうが納得できるからです。しかし、そういうものをすべて排除し、あなたは私を信じればよいというのが、神の変わらない考え方なのです。ここに神の愛があります。信じれば救われるというのは、平等です。頭の良し悪し、行いの良し悪しは、一切関係ないからです。この神を天の御座で賛美する様子が、ここに描かれています。

「長老のひとりが私に話しかけて、「白い衣を着ているこの人たちは、いったいだれですか。どこから来たのですか」と言った。そこで、私は、「主よ。あなたこそ、ご存じです」と言った。すると、彼は私にこう言った。「彼らは、大きな患難から抜け出て来た者たちで、その衣を小羊の血で洗って、白くしたのです。」(黙示録 7:13-14)

「白い衣を着ている人たち」とは、救われた人たちのことです。「彼らはどこから来たのか」という問いに対して、ヨハネが御座におられる主に向かって「あなたこそご存じです」と答えると、神は彼らを「患難から抜け出してきた者たち」と呼びました。彼らは小羊の血で洗われ、最大の患難である死から抜け出すことができました。罪が赦され、神と和解して永遠のいのちを得た者たちなのです。それは、次のように教えられています。

「あなたがたも、かつては神を離れ、心において敵となって、悪い行いの中にあつたのですが、今は神は、御子の肉のからだにおいて、しかもその死によって、あなたがたをご自分と和解させてくださいました。それはあなたがたを、聖く、傷なく、非難されるところのない者として御前に立たせてくださるためでした。」(コロサイ 1:21-22)

イエス・キリストの十字架によって、私たちは聖く、傷なく、非難されるところのない者として立たせてもらっているのです。

私たちは、神の御前に立たせていただいたと言われても、朽ちない体を着せていただいたと言われても、それが見えるわけではありません。それは、信仰で受け取るものです。

私たちは、見えないけれども、今神の前に立ち、神の前で礼拝しているのです。

■復活

「だから彼らは神の御座の前において、聖所で昼も夜も、神に仕えているのです。そして、御座に着いておられる方も、彼らの上に幕屋を張られるのです。」(黙示録 7:15)

教会とは救われた者が集う場所であり、キリストのからだです。私たちは教会に集まり、互いに仕え合い、それを通して神に仕え、やがて肉体の死を迎えます。そして、私たちが肉体の死を迎えたら、神が私たちの上に幕屋を張られるのです。それは、復活して天に引き上げられるということです。

「彼らはもはや、飢えることもなく、渴くこともなく、太陽もどんな炎熱も彼らを打つことはありません。なぜなら、御座の正面におられる小羊が、彼らの牧者となり、いのちの水の泉に導いてくださるからです。また、神は彼らの目の涙をすっかりぬぐい取ってくださるのです。」(黙示録 7:16-17)

これが、死を恐れる私たちへの答えです。神が私たちを救い、天に引き上げてくださいます。そこには、飢えも渴きもなく、平安です。そして、過去からも解放されます。このように神が私たちを助けてくださるから、何の心配もいらない、とヨハネの黙示録は教えているのです。

I コリントでは、次のように教えられています。

「兄弟たちよ。私はこのことを言うておきます。血肉のからだは神の国を相続できません。朽ちるものは、朽ちないものを相続できません。聞きなさい。私はあなたがたに奥義を告げましょう。私たちはみな、眠ることになるのではなく変えられるのです。終わりのラッパとともに、たちまち、一瞬のうちにです。ラッパが鳴ると、死者は朽ちないものによみがえり、私たちは変えられるのです。朽ちるものは、必ず朽ちないものを着なければならず、死ぬものは、必ず不死を着なければならないからです。しかし、朽ちるものが朽ちないものを着、死ぬものが不死を着るとき、「死は勝利にのまれた」としてされている、みことばが実現します。「死よ。おまえの勝利はどこにあるのか。死よ。おまえのとげはどこにあるのか。」死のとげは罪であり、罪の力は律法です。しかし、神に感謝すべきです。神は、私たちの主イエス・キリストによって、私たちに勝利を与えてくださいました。ですから、私の愛する兄弟たちよ。堅く立って、動かされることなく、いつも主のわざに励みなさい。あなたがたは自分たちの労苦が、主にあつてむだでないことを知っているのですから。」(I コリント 15:50-58)

このように、神は私たちに、死に対して勝利を得させてくださるのです。これが、神が与えてくださる自由です。

■自由とは

自由とは、奴隷に対して生まれた言葉で、「自由人」とは「支配されない」ということです。しかし、アリストテレスは、それが本当の自由なのかと疑問を抱きました。人は、自由というと、なんでもできることと考えがちですが、そうではありません。皆が欲望のままに生きれば、混乱しかありません。果たして、それが自由と言えるのでしょうか。例えば、国に法律がなければ、そこには混乱が生じ、やがてその国は滅びます。ですから彼は、国の法律、律法を守ることに於いて、初めて自由が得られるという考えにいたりました。この考え方は、聖書が教える自由と全く同じです。聖書が教える自由とは、欲望に支配されないこと、欲望と距離を保つことです。欲望のままに生きることは、自由ではなく欲望の奴隷です。

「すべてのことが私には許されたことです。しかし、すべてが益になるわけではありません。私にはすべてのことが許されています。しかし、私はどんなことにも支配されはしません。」(I コリント 6:12)

これが、聖書が教える自由の定義です。なんでも好きなことが選択できるばかりではなく、そうした思いにも支配されないことが自由だということです。人間には肉の思いがあります。そうした思いにも支配されないことが自由なのです。欲望のままに欲しいものを選択することが自由なのではありません。

そもそも私たちの欲望はどこから生まれてくるのでしょうか。聖書は、私たちは死の恐怖の奴隷であると教えています。死を恐れるがゆえに、私たちはこの世界に自分の生きている痕跡や価値を見出すことを求めます。自分の生きた証を残したいと願うのです。自分の生きている価値を確認するために、人は刺激を求めます。そうやって、一時的であっても喜びを感じ取って、人は死の恐怖から逃れようとしているのです。つまり、私たちは死の恐怖からの逃亡を求めて生きているということになります。ですから、死の恐怖から解放されない限り、私たちはいつまでたっても本当の自由を得ることはできません。

では、なぜパウロは「私はどんなことにも支配されはしない」と言いきることができたのでしょうか。それは、次の理由によります。

「パウロであれ、アポロであれ、ケパであれ、また世界であれ、いのちであれ、死であれ、また現在のものであれ、未来のものであれ、すべてあなたがたのものです。そして、あなたがたはキリストのものであり、キリストは神のものです。」(I コリント 3:22-23)

つまり、「私たちは神のものだ」という、このことを知って、パウロは欲望と距離を保つに至ったのです。人は、この世界が自分のものだと思つたため、この世界で好き勝手にふるまうことが自由だと思つています。しかし、そうではないのです。あなたは神に造られたものであり、あなたは神のものです。これこそが私たちを死の恐怖から解放するのです。そして、これこそが、私たちを欲望から自由にし、距離を保つことができるようにさせるのです。これが、聖書が語る自由なのです。

私たちは神のものであり、神が私たちのいのちであり、神が私たちと共に生きているというところに立たない限り、私たちは自由になることはできません。そして、「私は神のものだ」と告白する者は、この死の世界から脱出し、肉体の死と同時に天

にあげられるというのが、神の計画であり、神の約束です。これを、自由を得るといいます。

つまり、この世界には自由はなく、私たちは死の恐怖の奴隷として生きているわけですが、そこから私たちを解放するために、イエス・キリストはこの世に来られたのです。

「またさらに、「わたしは彼に信頼する。」またさらに、「見よ、わたしと、神がわたしに賜った子たちは。」と言われます。そこで、子たちはみな血と肉とを持っているので、主もまた同じように、これらのものをお持ちになりました。これは、その死によって、悪魔という、死の力を持つ者を滅ぼし、一生涯死の恐怖につながれて奴隷となっていた人々を解放してくださるためでした。」（ヘブル 2:13-15）

私たちには自由がなく、常に死の恐怖におびえているのですが、それを見ないように生きています。死の恐怖に向き合わずに刺激を求め、自分は自由だと勘違いしています。しかし、イエス・キリストは「あなたは自由になれる。死の恐怖の奴隷から解放される。」と言われました。私たちは、キリストによってこの世界に対して死ぬことができ、それによって初めて何物にも支配されない者になれるということです。それがこのヨハネの黙示録に書いてあるのです。

必ず私たちは天に引き上げられ、この世界とは完全に縁が切れます。それは過去を赦されるということです。イエス・キリストが私たちに与えた自由とは、過去からの解放です。私たちが苦しめているのは、常に過去です。過去の苦しみを思い出して、今苦しんでいるのです。これが死の世界です。死の世界はすべてを過去にします。どんな夢を抱こうとも、それは、すべて過去になります。あなたが死んだ途端にあなたの夢はすべて過去のものになります。つまりこの世界はすべて過去なのです。これが死の世界です。

私たちが自由になるためには、過去から解放されるしかありません。それがイエス・キリストの十字架の贖いです。キリストの十字架は、すべてを赦し過去を白紙にします。そして、あなたの心を未来に開くようにするのです。神は未来です。神の前に過去は存在しません。だから、あなたが誇る過去もないし、あなたが悔やむ罪もありません。神は、未来に向かって、今あなたと共に生きる神です。そしてあなたの未来はすでに確定しています。それは、天国に引き上げられ、神と共に生きていくという未来です。イエス・キリスト十字架の贖いは、過去から解放されて心を未来に開きなさいと語りかけます。これが自由を手にするということなのです。